

---

**ティファクトでも黒でもないクリーチャー 1 体を対象とし、それを破壊する。それは再生できな**

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーティファクトでも黒でもないクリーチャー1体を対象とし、それを破壊する。それは再生できない。

### 【Nコード】

N0371N

### 【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

### 【あらすじ】

夏と言えば怪談。

恐ろしいもの、怖いもの。

そんな物語を人々は何故求めるのか。

そこには、一体何が隠されているのか。

女子高生と本屋の店主の、まったくもって慄かない会話劇。

**(前書き)**

タイトルの意味が分かる人は、その意味通りの話だと思ってください。

タイトルの意味が分からない人も、その意味通りの話だと思ってください。

「店長。怖い話ってない？」

「客が来ないことかな。夏休みの平日なのにジャンプが売れないんだよ。やっぱりあれだよな、ジヨジヨを切っちまったのが失敗だな。もうおっさんはワンプとかナルトとか全然わからないから。ジヨジヨだけのためにジャンプ買ったのに」

「いやいや、ジャンプ談義はいいからさ、賢い犬も終わっちゃうし。純粹に単純に怖い話が私は欲しいの」

「なんでまた怖い話なんだよ？」

「向日葵ちゃんや涼ちゃんと肝試しか、百物語をやるうって話なの」  
「夏だねー」

そんな会話が成されるのは、駅前のいつ潰れてもおかしくない（本当に笑えない）本屋。昼を少し過ぎた所で、二人は四角くカットされたスイカを口に運びながらそんな話をしていた。

「そう、夏なのよ！ だから怖い話で涼しい気分を味わいたい」

黒い甚平を着た、何だかヤンキーみたいな恰好の小野が拳を握って力説する。

「俺が生まれ育ったイギリスでは、怪談は冬に暖炉の前でやるもんだったけどな。ばーちゃんが作ってくれたスープが絶品でさ」

「そんな嘘を平然と言う店長が怖いよ！ どーみても日本人じゃない！」

小野よりも赤色や黄色のスイカに夢中な店主は、明らかに投げやりな態度で相槌を打つ。

「こちらは何故かきちつとしたスーツ姿。ネクタイまで締めていて、いつも剃っていない無精ひげも綺麗になくなっていく。絶対に本屋の店主の服装でないのだが、小野は気にしないことにしている。なにかのコスプレと思うことに決めた……それはそれで嫌だが。」

「夢のない奴だ。『トイレの花子さん』とか『走る人体模型』とかはイギリスからの輸入された怪談なんだぞ？ 『首なしライダー』とかもそうだけど、日本人は外国の文化を取り入れるのが非常にうまい」

「それは店長がイギリス生まれの証明ではないけどね」

「夢のない奴だな」

「嘘に際限がない店長よりはましでしょ」

「理想に際限がないんだよ」

スイカの種を爪楊枝で器用に外しながら、二人は取り留めのないことを言い合う。

歳が一回り以上違うのに、妙に会話が通じる二人であった。

「スイカってさ、なんで塩を振ると甘く感じるんだろ？」

「強敵と戦った後は、一回り成長するだろう？」

「なるへそ、って違うって！ 怖い話！ ジャンプでもスイカでもなく怖い話！」

「怒るなって、怖い顔にシワが走ってるぜ？」

「怖い顔に！ 可愛い顔にじゃなくて！」

「マイナス×マイナスで今、可愛いよ」

「凄くうれしくない！ ってか、話を逸らさないでよ！」

椅子から立ち上がり、ぎゃんぎゃんと吠える小野を適当にあしらいながら、店主はスーツにスイカの汁がつかないように口に運んでいく。

その様子を見て、小野は渋々腰を下ろす。  
きつと、このおっさんは食べ終わるまで真面目に話を聞かないだろう。

二人は黙々と爪楊枝をスイカに突き刺し口に運んでいく。まさしく競うようなスピードであった。

「やっぱり夏はスイカだよ。日本人なら怪談でも花火でも祭りでもなく、夏はスイカ。民族が誇るべき文化は食文化だけで十分なんだよ」「だめダメ駄目。その流れだと間違いなく文化についての話し合いが始まっちゃうから。私がしたいのは怪談！ 恐怖するお話！」

「はいはい。怪談ね」

「そうそう、怪談」

雑巾でカウンターの upper を拭く。カウンターの upper に鎮座するスイカの食べかすをどうしようかと一瞬だけ悩んだ後、店主は小野が帰った後に片づけることに決めた。商売の邪魔になること間違いはないが、どうせ客も来ないのだから問題ないだろう。

「怪談って言うからには、摩訶不思議であって奇妙奇天烈であって奇想天外であって魑魅魍魎が跋扈するような恐ろしい話を俺がすればいいわけだな？」

「そうそう。とびっきりの恐怖をみんなにプレゼントしてやるんだから」

「しかし何故にわざわざ怖い思いをしたがるんだろうな？」

「あれ？ そう言う流れ、今回はいいんだって。普通に怖い話をください」

「怖い話を語る前に、何が恐怖で、何が恐怖でなくて、どう恐怖するかを語るべきではないだろうか？」

自信満々に、店主がそう断言する。それはもう、日が昇る方角を

言い当てるような言い方であった。

「そもそも、恐怖とは何だ？ 小野よ」

「なんだって、恐ろしくて、怖いものなんじゃあない」

もうどうにでもなってくれ。投げやりに答える小野。

「その通り。恐怖とは『命を脅かす』いや、まどろっこしい言い方だな。命だなんて。『死を連想させる』モノなわけだ」

「うん？ 死にたくないから恐怖するってこと？」

「だな。恐怖から死を連想するわけじゃあない。死を思う行為こそが恐怖と呼ばれたんだよ」

「なるなる。色々なことを聴いて、様々なものを見て『ああ、私死んじやうんだよな』って思う行為が恐怖ってことだよな」

「例えば断崖絶壁だったり、刃物だったりな」

右手で抓んだ爪楊枝の先端を見つめながら、店主が笑う。

「で、恐怖した人間って言うのはどうなる？」

「どうなるって、怯えて固まって動けなくなちゃうんじゃあない？」

「それもああるな」

「むむむ。何かを含んだ言い方。ちょっと待ってて、当てるから」

喋ろうとした店主を右手で制して、小野が目を閉じて首をかしげる。それは、何かを考えています。そうアピールしているようなポーズであった。眉根にシワを寄せて考えるその様を見て、

「正解は『心臓の鼓動が高鳴る』でした」

「えー！ 待ってって言ったじゃん！」

「時間切れです」

躊躇なく答えを言う店主と、大人げない行動に子供らしく反発する小野。本当に精神レベルの近い二人である。

「とにもかくにも、心臓がバクバク言っただけで体中に血が巡る。その結果として、脚は早くなるだろう。筋力が増加され、瞳孔が広がって、アドレナリンやホルモンが出て興奮状態に陥る」

「つまり、戦う為の身体になるわけ？」

「戦闘形態だな」

合体変形や戦闘隊形には、いくつになってもテンションが上がってしまう店主であった。

「……でもさ、私の言った身体が動かなくなるも外れじゃあないでしょ？」

「もちろん。そうして身体の動きを少なくすることで、対象から見つかりにくくなるっていう効果が見込めるからな」

「蛇に睨まれたカエルと同じ原理ね」

「カエルが死を連想するかどうかは置いて、同じと言っても過言じゃあないだろうな。恐怖によって、人間はその身体を普段より上手く使えるようになるわけだ」

「でもさ、錯乱して突っ走って死んじゃうこともあるんじゃない？」

「『殺人鬼のいる部屋で眠れるか！』みたいなやつか」

的確な店主の喩に小野は微笑む。

どう考えても、皆と同じ部屋で寝ていた方がお互いをお互いが牽制しあえて安全なのだが、彼らはそんなことも考えずに部屋を出て行ってしまふ。

あれは何故なのだろうか？

「それは多分、単純な逃避だろ。死を連想させる……この場合は殺人犯から距離を置いて気を落ち着かせるっていうのは存外悪くはないだろう。それに、緊急事態だからこそ、ありえない状況だからこそ、ありえない行動をとってみるんじゃないのか？」

「窮鼠猫噛み？」

「また動物か。でも、そうだな。ありえない、普段通用しない事象を試すことも、恐怖状態のパラメータなら通用する可能性があるからな」

「パラメータって」

完全にゲーム気分の店主に小野は呆れる。もっと他に賢そうな言い方ぐらい、この男なら知っているだろうに。

「さてはて、結局、俺の言いたいことはわかったかい？」

再びのクイズタイム。

店主が小野に汚名返上のチャンスを与えとも思い難いので、今日の服装と同じ、ただの気まぐれなのだろう。

この機会を逃してなるものかと、腕を組んで頭を回して小野は考える。

そして、それらしい答えに辿り着く。

「生きたいってこと？」

大正解だと店主が白い歯を見せる。

「もっとも、最初に『死を連想する行為を恐怖と呼ぶ』なんて大ヒントをやっていたんだから、正解できて当然なんだけどな」

「こんな司会者だったらクイズ番組見るかもね」

店主の気が利き過ぎたフロアに、皮肉気に答える小野。

「だろ？ 俺にマスターオブセレモニーを任してくれるTV局はないものかね？」

寂れた本屋のおっさんに、そんな重要な役を任せられるわけがない。できたとしても、不快指数マックスですぐ打ち切りだ。

「恐怖って言うのは、生きたいって言う意味でオツケー？」

「っていうか、『生きるために戦う』には必要なシステムなわけだな」

「逃避も戦いに入るの？」

「入る。生きていれば、闘うチャンスは再び来るのさ」

「好きだね。闘争」

「好きっていうか、人生そのものなのさ。闘わない人生に意味はない」

「意味はないって……相変わらず極論だね」

もつとも店主のこう言った所は、小野は嫌いではない。

普通ではない価値観。なくなつた意志。通用しない概念。

そうした通常は触れることのない考えに触れるチャンスを、純粋に小野は面白いと思えるし、必要だとも思っている。

「そうさ、闘争を楽しもうじゃあないか。お前らだって、だからこそその怪談だろう？ あの忌々しい自由論によって、逃避を余儀なくされてしまったあの恐怖に会うために、地震から引き裂かれた闘争を感じるために、わざわざお前らは好き好んで怖い目を見たがるんだろう？ 恐怖から感じる、甘美な闘争とその後の成長こそが、お前らの食指をそそるんだ。若いからこそ、無意識的に憧れるんだ」

「男の子が度胸試しを好きな理由もそれ？」

「そうさ、恐怖を身に着けることも重要だし、勇者になるにゃあ、恐怖を感じるところに行かなければ話にならんからな」

「どれだけレベルが高くて、スライム虐殺じゃあ勇者にはなれないもんね」

「勇者つて、称号みたいなもんだからな」

「だよ。職業『勇者』つて、冷静になってみると詐欺臭いよね」

「つていうか、取らぬ狸の皮算用的な何かがあるよな」

二人して、職業欄に『勇者』と書く男を想像して吹き出す。

それは、自分は神だと名乗るのと同等なくらい、アレな人しかできないだろう。

「そんな人に世界の運命をまかしてたの？」

「ゾーマだつて吃驚しただろうな」

「怖いわよー。『魔王様！ なんか勇者つて名乗ってる奴が地上にいます！』つて部下から報告が来るのよ？」

「それは心臓に悪いな。『え？ バラモス倒されちゃったの？』つて思っちゃうな、それ」

「『いえ、勝手に勇者つて言ってます。なんか、勇者の息子らしいです』もうカオス過ぎない？ この会話！」

「つて言うか、今の高校生にこの話題が通じることに、おじさんは猛烈に感動してる」

まさか女子高性との名作について語れるとは思っていませんでした。店主は、嬉しそうに驚いていた。

なんで主人公の親父は覆面を被ってパンツ一丁であそこにいたのか。そんなことも話してみたいとも思ったが、それは小野の一声で却下される。

「つて、また脱線！　こんな電車は乗れないよ！」

「話には乗っかってきたくせに」

「うまいこと言った？！　じゃあなくて、怖い話！　怪談！　今までの十分で話は何一つ進んでないよ？」

「確かに関係のない話をベラベラとし過ぎちまったな」

「そうそう。こっからが本題なわけだね？」

「その前に、だ」

「その前に何よ？」

「ここらで一杯、ブルーマウンテンが怖い」

「落ちの要求が洋風だ！」

(後書き)

長編一本と、短編をそれぞれ書いてます。  
興味がある方は他の作品もどうぞ。

感想とリクエストも募集中です。

あなたの疑問や考えを、店主と小野ちゃんが暇つぶしに話してくれます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0371n/>

---

アーティファクトでも黒でもないクリーチャー1体を対象とし、それを破壊す

2010年10月13日05時58分発行